

2009年8月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

200 hPa 風速場で見ると、ユーラシア大陸上のアジアジェットが南偏が明瞭だった。500 hPa 高度場で見ると、グリーンランド付近で正偏差、北大西洋東部や東シベリア海付近で対流圏上層のトラフの発達に対応する負偏差が明瞭だった。日本付近から北太平洋にかけては、準定常ロスビー波の波束伝播に伴う波列状の偏差が分布した。カスピ海周辺では対流圏上層のトラフの深まりが顕著で、更に同領域の対流圏下層では寒気を伴った高気圧の発達、南下が見られた。このため、カスピ海やバルハシ湖付近で顕著な低温偏差となった。なお、南半球の高度場では対流圏、成層圏ともに東西波数3の波動の発達に対応する偏差分布が明瞭となった。このため、月を通して気圧の谷の北側に位置したオーストラリアでは、平年より暖かい北寄りの風が卓越し、顕著な高温となった。

熱帯の対流活動は、ベンガル湾とフィリピン付近でかなり不活発だった一方、インド洋東部赤道域や東部太平洋と大西洋の10°N 帯では活発だった。オーストラリア北部やアフリカ赤道域、中米、キューバ周辺でもかなり不活発だった。対流圏下層では、北西太平洋で低気圧性循環偏差が見られた。太平洋赤道域では、東部を中心に8月を通して西風偏差が卓越した。対流圏上層では、チベット高気圧は平年より南偏してい

た。赤道季節内振動 (MJO) に伴う対流活発な位相は、上旬に太平洋から大西洋へと東進した。その後東進は不明瞭となったが、8月末には、対流活発な位相の東進がインド洋から日付変更線にかけて見られた。南方振動指数 (SOI) は-0.3だった。

世界の天候

2009年8月の世界の月平均気温平年差は+0.39°Cで、1891年の統計開始以来、2番目に高い値となった。8月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.61°C/100年である。

○ミクロネシアからアフリカ西岸にかけての広い範囲で異常高温となった。

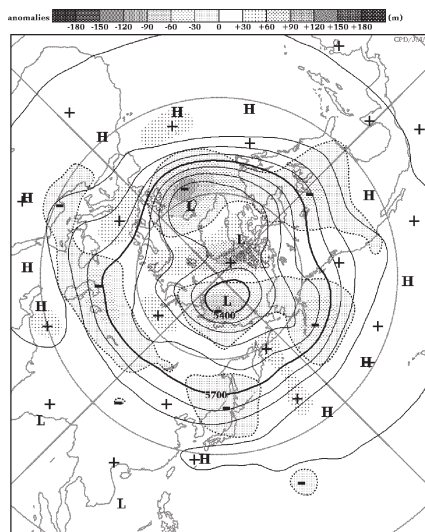
○メキシコから南米北部では、対流活動が平年よりも不活発で、異常少雨、異常高温となった。

○オーストラリア周辺では、北からの暖気の影響を受けることが多く、異常高温となった。

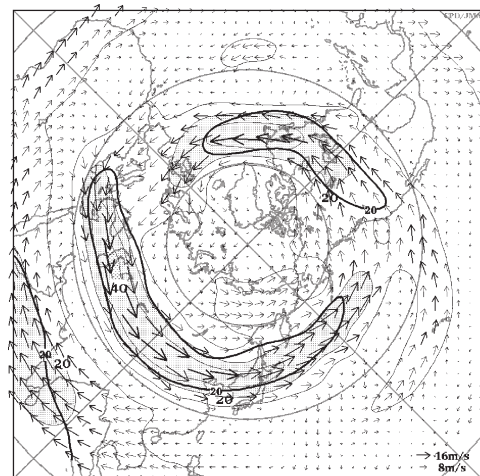
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

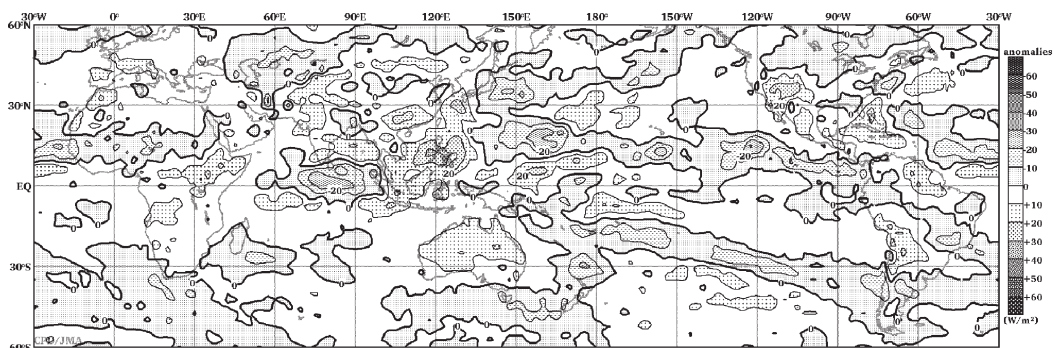
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2009年8月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979～2004年のデータから作成。

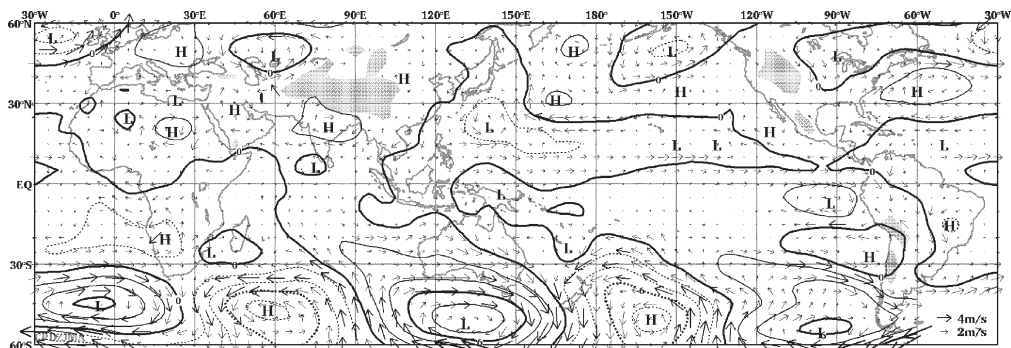


2009年8月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は10 m/s。陰影部は20 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の20 m/s以上の領域を示す。平年値は1979～2004年のデータから作成。



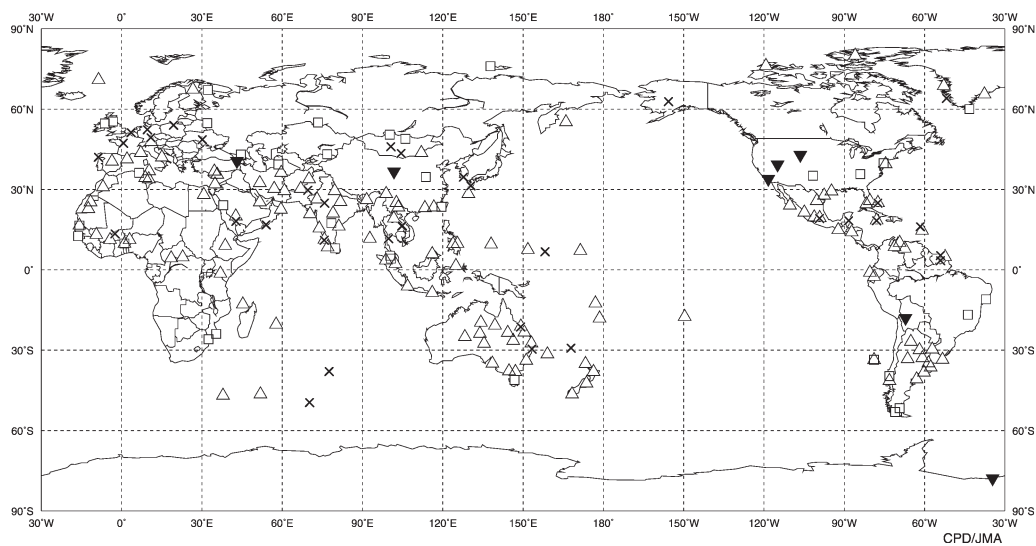
2009年8月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10 W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA、年偏差は1979～2004年のデータから作成。



2009年8月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、年偏差は1979～2004年のデータから作成。



2009年8月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。